コロナの経験は貴重な財産、継承大切　青森県感染症対策コーディネーター・大西医師に聞く

3/23 東奥日報

5年間のコロナ対応を振り返る大西基喜医師

青森県感染症対策コーディネーターの大西基喜医師は、次なる未知のウイルスとの闘いに備え、新型コロナ下の5年間で経験した医療機関の協力関係や保健所間のネットワークが貴重な財産になるとの認識を示した。

―2020年3月に県内でコロナ感染が初確認された時の状況は。

「危機感と緊張感がずっとあったので、実際に来た時のインパクトはそこまでではなく『来たか』という感じ。ただ、実際に感染者が出ないとみんながピンとこない部分もあり、ここからベッドなどさまざまな調整が本格的に進んだ」

「未知の感染症に対する恐怖と防御したい気持ちが強く、最初の1年は誹謗（ひぼう）中傷や人権侵害の問題が大変だった。個人情報が少しでもあるとどんどん特定された。できるだけ注意して情報提供したり、相談窓口を設置したりしたが、社会的影響の大きさという意味でとても印象深かった」

―特に大変な時期は。

「21年のアルファ株やデルタ株の時期。催しや人が集まる機会が復活する中でどんどん感染者が増えた。重症化する人が多くてあっという間に肺炎になり、病床がギチギチで医療的に一番大変だった」

―感染対策はどう変わっていったか。

「一例ずつ対応して少しでも封じ込めるのが最初の力点。『緊急事態宣言』『まん延防止等重点措置』など人の流れをコントロールし、社会への抑制的な働きが必要というのがこの頃の考え方だった」

「力点が変わったのがオミクロン株。高齢者や基礎疾患などリスクがある人を重点的に対応し、一般の人が感染するのはある程度許容するしかないのが当たり前になった。それを裏付けるように5類に移行した。オミクロン株が現れ軽症化が顕著になった時期と、人々がコロナに慣れてきた時期がたまたま重なり、対策がスムーズにいくようになった偶然の要素も大きい」

―コロナの経験はこれからどう生きる。

「コロナのようなパンデミック（世界的大流行）は一生経験しない人も多い。医療機関が協力し合ったり、保健所間のネットワークができたりしたのは貴重な経験だった。何かあった時にすぐ態勢を取れるよう継承していくことが大事」

「基本的な対応の進め方はコロナで学んだ。それはどのウイルスが次のパンデミック（世界的大流行）を起こしても通用する。ただ、コロナの影響はもう少し先までしっかり見ていくことも必要だ」